

学校における教育相談の在り方について

カウンセラー研修員 渡辺 克己(川崎市立宮崎中学校)

主題設定の理由

近年、テレビや新聞紙上などのマスコミでは、不登校の問題やいじめ、暴力行為が大きく取り上げられ、年々低年齢化の傾向が見られる。学校においても早期発見や迅速な対応に努めているが、問題は複雑多岐にわたることが多く、対応に苦慮しているのが現状である。

この背景には、児童生徒を取り巻く社会や生活環境の大きな変化があることは否定できない。情報化社会となった現在、著しく普及した「パソコン」や「携帯電話」の個人所有により、瞬時に得たい情報の入手が可能となっている。しかし一方では、集団で活動する機会が減少し、人とかかわりをもちながら物事をやり遂げる体験が欠如しがちである。そのため、自己中心的で相手の立場に立った接し方ができなかつたり、自分の感情や思いを相手に伝えられずにトラブルになることも多くある。

ここ数年、多くの生徒とかかわりをもつ中で、些細なトラブルが暴力に発展するケースや人とのかかわりに対する逃避行動、素直に罪を認めない行為、言葉やメールによる他人への中傷、集団生活不適應、人間関係構築の困難さなど、様々な生徒の変化に接するようになり、「人とのかかわりの希薄さ」が問題を引き起こしている一因ではないかと感じるようになった。

そこで、「人とかかわることの大切さ」の理解を主眼に置き、学校が抱えている問題点を整理し自らの指導を振り返りながら、学校における相談活動の在り方について探ろうと考えた。

研究の内容

この1年間、カウンセラー研修員として研修や実習に参加して、教育相談の考え方や技法を文献や心理臨床相談員、電話相談員等、教育相談センターの多くの方より学ぶことができた。また、心理臨床相談員のもと、子どもの相談に携わることもできた。そして実習を兼ねたゆうゆう広場での活動では、子どもたちとの触れ合いの他、専任教諭を始め、電話相談員、カウンセラーからも貴重な意見をいただくことができた。

1 学校が抱えている問題

本来、集団生活は個を互いに認め合って成立するものであり、学校は生徒から見て楽しく安心できる場所ではなければならないと考える。学校で生活することは、個人がどのように集団とかかわりをもって生活していくかということであろう。学校は互いに教え合ったり、学んだりする中で、人とのかかわりを学べる数少ない場でもある。集団の意識を向上させるために学年の枠をはずし、人とのかかわりに重点を置いた活動を取り入れている学校や、生徒の自主性や主体的な活動の中から学校行事を生徒に企画させたり、運営を任せて集団の意識を高めさせている学校もある。また、部活動は学校や生徒にとって、集団の意識や所属感が味わえる活動の場として大きなウエイトを占めている。

しかし、活動を通して上手くかかわりがつくれず、トラブルに発展することもある。特にそれは、集団の規模が学級、学年、全校へと変化するときに見られるようである。さらに、自分を取り巻く環境の変化によって人とのかかわりに違いが生じる場合も見られる。

また、人間関係が上手くつくれず、人と接することでストレスを感じている生徒や、複雑な思いをしてまで人と関係をつくらうとしない生徒、人とかかわりをもつ中で不安や悩み、戸惑いなどを抱え込み、不登校の状態になっている生徒もいる。

(1) 人との距離

中学校入学当初、子どもたちは各クラスで和やかな雰囲気会話しているが、小集団をつくる傾向が見られる。心を許せる仲間に対しては打ち解けた感じであるが、気が合わない者に対しては異常なほど離れた距離を置く様子も見られ、その小集団の中で、互いの連帯意識や所属感を味わっているように見える。時として、個人間の問題が集団を巻き込んだ「無視」に発展するような問題に発展すると、今まで保持していた距離が一変する。集団や仲間から疎外されることで、短かった距離が異常に離れて関係の修復が困難となる。しかし、一転して、疎外の対象者が替わると、離れていた距離が短くなり関係が修復されることもある。このような集団に所属することで安堵感が得られる反面、疎外の対象にならないよう精神的エネルギーを使って人との距離を置くことがわかる。

(2) 断片化された会話

休み時間には、教室や廊下などいたる所で生徒の日常会話が耳に入ってくる。俗語や流行語も混ざり盛り上がりを見せている。会話というよりも、一瞬や一場面の話が断片的に構成されているため、話の経緯や過程が見えず、単語や言葉を羅列しているだけのように感じる。このように省略されすぎた会話内容から誤解が生じてトラブルに発展することも見られる。

(3) 頻繁に聞かれる言葉

仲間からの紹介や言葉を交わしただけで、「メルアド(メールアドレス)やバンゴ(携帯電話の番号)教えてもらったから友達だよ」「上の名前(姓)は知らないけど、一緒にいたから」など、非常に浅いつき合いにもかかわらず、「友達」という言葉を繰り返す。相手をよく知らない段階でメールアドレスや番号等の個人情報を教えてしまった罪悪感よりも、断ることで相手に与える冷たい印象や仲間外れになる恐れを、心の底で感じ取っているようである。

また、指導の場面において「私だけではない。みんなもやっている。」という言葉もよく耳にする。「みんながやっているのでは仕方がない。」と思われがちであるが、「みんな」(みんな、皆=全部。全てのもの。全ての人<広辞苑第五版>)を数えさせてみると、少数しか挙がらず困惑させられる。

教師や保護者が思う以上に、「人とかがかわる範囲の狭さ」や「人とのかかわりの薄さ」を感じることもある。

(4) 謝罪の場面から感じること

生徒は謝罪の場面において「ごめんなさい」という言葉をよく使う。最もわかりやすく相手に伝わる言葉である。しかし、相手の心情を配慮せず、誠意の感じられない謝罪にしばしば接することがある。また、受ける側も「ごめんなさい」という言葉で、いとも簡単に謝罪を受け入れてしまう光景も見られる。トラブルに対する解決能力が身に付いておらず、一番大切にすべき相手の心情を察知することがないままに、過ごしてきたように推測される。

どことなく無機質な内容で寂しく感じる内容である。言葉の投げ掛け一つで、相手のもつ印象や感情が大きく変化することを機会を、とらえて伝えていく必要性を強く感じる。

(5) 不登校生徒の現状

近年、川崎市内においても不登校生徒の出現率が高く深刻化しつつあると指摘されている。本校においても不登校生徒への指導と対応が緊急課題となっている。平成15年度の川崎市における不登校生徒数(学校基本調査より)は、小学校221人、中学校1,079人で、一昨年のデータ(小学校295人、中学校1,167人)と比較すると小中学校の合計で162人の減少になっている。

しかし、周知の通り「不登校の原因」を一言で言い表すことはできない。学校や家庭環境、友人関係、生育歴、保護者の過干渉、価値観の違いなど様々であり、多岐にわたり複合されている場合もあ

るため、数値的に減少にあるからといって解決の方向へ向かっているとはいえない。学級担任は「何とかしたい。してあげたい。」という熱意や責任感のあまり、現象面をとらえた指導を行いがちになるが、学級担任だけが抱え込まずに、学年や学校の問題として多面的にとらえる必要性を感じる。

このように学校が抱えている問題や現状を整理して、課題をもちながら研修に参加させていただいた。

2 研修や会議に参加して

(1) 教育相談センターの役割

教育相談センターの相談では、子どもの発達やいじめ、不登校、友人関係、学校生活の相談や保護者の子育てに関する悩み等について、溝口相談室と塚越相談室の2カ所で来所相談など、様々な形の相談活動を行っている。

教育相談センターの相談活動は治療的な役割が大きく、相談活動を適切に展開していくために専門知識をもつ心理臨床相談員が保護者の面接や子どもの相談を受けている。相談活動は、相談者の第一印象や服装、振る舞い方、話し方や表現の仕方、周産期の状況や生育歴等、細部にわたって気配りをしながら進めている。相談内容を真剣に受け止め、優しく親身になって相談者に寄り添い、根気強く見通しをもって最後まで携わる心理臨床相談員の姿勢は、学校において保護者や生徒と接するとき参考になる大切な姿勢である。また、学校と違い、専門的な支援が得られるため、悩みを抱えた保護者や子どもにとっては心強いことである。相談活動は原則として、相談者の主訴が解決することで終結となるが、未解決の場合は長期にわたり継続することにもなる。

(2) ゆうゆう広場における実習

研修期間中に「ゆうゆう広場」（川崎市適応指導教室）の実習に参加する機会に恵まれた。「ゆうゆう広場」に通級することでエネルギーを蓄え、不登校状態が改善され、在籍校へ復帰できるようになることをめざしている。市内には「さいわい」「たま」「あさお」の3カ所が設置され、市内の小中学校からの入級相談が殺到している。入級している子どもたちは、様々な要因により引きこもりや登校渋り、不登校の状態を経験してきた子どもたちである。

学校生活で様々な問題傾向が表面化するエネルギーのある子どもは、現象としてとらえやすく教師がかかわるチャンスをつかみやすい。その反面、エネルギーが弱ってしまった子どもの場合は、認知が遅れ、行動や症状が表面に出てきたときには、学校や周囲の者からの疎外感や不信感が募り、登校渋りや不登校につながっているように感じる。日頃から教師は、児童生徒とのコミュニケーションを十分にとり、本音や心情、危険信号を察知することはもちろん、児童生徒が相談をもち掛けやすい関係をつくっておく必要性を感じた。

(3) カウンセラーの姿勢

相談活動では、カウンセラーの姿勢も非常に大切な要素であることを学んだ。相談に対する考え方や技法は色々だが、全体に共通して純粹性、受容、共感的理解の3つの事柄が重要であると感じる。

「純粹性」は学校でも実践すべきものであると思う。学校では相談者から問題の早期解決を求められることが多く、問題が複雑なほど先入観や推測で物事を判断しがちになる。しかし、相談者に温かく誠意をもって接し、時には率直な気持ちや正直な姿勢を伝えることによって、互いの信頼関係が深まっていく。

「受容」は相談者の考えや価値観などを評価せず、見方や考え方を大切にして思いやりの気持ちをもって接することである。日頃から教師は指導に対する評価を行っているため難しい問題もあるが、常に受け入れる姿勢をつくっておくことが大切である。

「共感的理解」を学ぶ中でカウンセリングの基本に「傾聴」があることを知った。相談者の話を漠然と聴くのではなく、相談中の言葉や心情によるキーワードをとらえ、相談者の思いに共感することである。教師が生徒の言葉に耳を傾けることは、人とかかわりをつくる上で重要なことだと思う。生徒の見方や考え方に思いやりをもって接することで、不安な気持ちが楽になるのではないだろうか。

(4) 相談活動の事例から

心理臨床相談員の指導のもと、子どもの相談担当として遊戯療法（プレイセラピー）を経験させていただいた。学校の相談とは違い、1ヶ月に2回のペースで、守られた空間と50分という決められた時間を相談者と共有して相談活動を行う。

Aさんは様々な問題を抱えて不登校状態になった。知人の紹介で、保護者が教育相談センターを訪れた。「学校に登校ができず、一人で外出することもない。自分から発言することはなく、昼夜逆転現象が見られ、同世代の子どもに会うことを避けている。」とのことである。

Aさんの担当になったとき、緊張よりも責任の大きさを感じた。学校では面識のある生徒が相談の対象になるため、容姿や振る舞いがわかる。しかし、全く面識のないAさんへの接し方に戸惑いを感じたため、事前に親を担当する心理臨床相談員の助言もあり、心の準備をして相談に入った。

初対面のため、緊張で顔はこわばっていた。保護者にしびしび連れて来られた様子である。物静かで弱々しく、年齢よりも幼く見えた。自己紹介も照れくさそうに下を向いて目を合わせず、小さな声で名前を言ったことが印象的だった。建物の中にプレイルームが存在していることに驚いた様子が伝わってくる。Aさんにこのプレイルームが居心地の良い場所になってもらえればと、丁寧に約束事や遊具の説明をした。初めはプレイルームの遊具に圧倒されていたが、徐々に落ち着きが出てきた。人生ゲームを行う中で、堅実にコマを進める様子や丁寧にお金を並べる姿から、几帳面な性格であることがわかった。時には、収入が高額になり、大きな声を出して喜ぶ無邪気な姿も見られた。

通常、学校では問題の早期解決が求められるため、子どもに会った時点で理由や原因を聞き、指導の手だてにしてきた。しかし、事前に心理臨床相談員から時間をかけてじっくりと本人から自然と話をしてくれるときを待つスタンスが必要である事を学んでいたため、学校に関係する言葉や内容を話題にしないことにした。相談終了後の「楽しかった」という言葉が、とても新鮮に聞こえて嬉しかった。

相談を重ね少し慣れたのか、ぎこちない会話が少なくなってきた。初めて自分から遊具（グローブ）を取りに行き、キャッチボールを行う。返球されるボールを落とさないように、全身を使ってグローブに収める姿はとても真剣だった。休憩の間には、幼いときにキャッチボールをした経験や自信をもって好きな教科を話す顔が、とても印象的だった。相談を重ねるごとに、笑顔を取り戻し元気になっていく姿が見られ、こんな姿からも少しずつ変わってきていることが感じられた。

保護者を担当している心理臨床相談員から、1日だけであるが学校に登校できたことが伝えられた。

遊戯療法を体験することで、遊び（プレイ）の中から遊具の選択や話し方、表現や行動、振る舞い方や心に変化を起こし、それを表現するメッセージが様々な形で現れ、精神的エネルギーが不足している子どもには有効であることを学ぶことができた。

Aさんの受け身的反応はまだ強いが、これもAさんにとって1つのスタイルだと感じる。相手の気持ちに寄り添い理解することは、人とかかわりをもつ上で大切なことだと感じた。

3 学校生活でのかかわりの場面

(1) 各種行事の必要性

近年、日常生活において体験的活動の機会が減少して、人とかかわる機会が極端に減り、それがコ

コミュニケーション能力の低下につながっているとマスコミ等でいわれている。

現在、学校では校内行事をはじめ、各種ボランティア活動や地域行事への参加、職業体験学習などの人とかかわりを広げる様々な活動が展開されている。活動のねらいに「人とかかわりをもつ中で得られる経験や体験」を重視して、児童生徒から自主性や主体性を引き出すとともに、責任感をもてるようにしている。経験や体験的活動から得られる達成感や所属感から心が豊かになり、人に対する優しさや思いやりをもたせる試みをしている。

しかし、自主性や主体性は「すべて生徒に任せる＝放任」と錯覚しがちになる。教師は生徒を温かく見守りながらかかわりをもち、適切なアドバイスや支援を行うスタンスをもたなければならない。コミュニケーション能力を向上させるためにも、経験や体験的活動の重要性を感じる。

(2) 学校教育相談の実践

学校が生徒にとって楽しく安心できる場所になるためには、日頃から生徒が何を感じてどのような考えをもっているのかを知り、生徒が抱えている気持ちや思いを共有し、生徒理解に努める教師の姿勢が大切であることを研修を通して再確認することができた。

教育相談期間について

学校における相談活動を、教育相談期間などの一過性の活動としてとらえるのではなく、継続した活動としてとらえ直した。各学期の定期考査期間中に重点的に実施している教育相談は今まで通り実施し、それ以外に普段の放課後などにも意識的に学級担任が教室に残り、相談のきっかけが生まれやすい場面づくりを試みている。その結果、以前より学級担任が生徒と時間を共有する機会が増え、レポートづくりをする光景が見られるようになった。

教師のスタンス

保護者や生徒が相談を訪れる場合は、問題が複雑になっており、早期対応や解決を求められる。しかし、問題解決を急ごうとすると、問題の実態や状況の把握がしきれなかったり、段階を整理して正確に情報を収集することが困難になったりする。さらに早期対応や解決が優先されるため、相談者の性格や心情などの内面に触れた相談が十分になされないこともある。そこで、どんなときにも共感的な姿勢をもちながら相談者に接し、問題発生時の初期対応や言葉の掛け方の工夫を念頭に置くことで、効果的な教育相談の実践へのつながりが生まれてくるものと考えられる。

連携をとった相談活動

学級担任は相談の窓口になっているが、教科担任や部活動の顧問、他の学年教師に相談が及ぶこともあるため、学級担任が問題を抱え込まず、チームを組んだ相談活動が必要になる。生徒がもっている性格や価値観に加え、相談内容の多様さもあるため、相談する教師が複数になることは好ましいことでもある。そのため、教師間で生徒に対する意思の疎通や共通の理解を図り、綿密な情報交換を行いながら生徒の問題を共有していくスタンスが教師側に望まれる。

新たな試みとして、打ち合わせや会議の場で生徒の動向を連絡する時間枠を設けることができた。学校生活を見渡してみると、今まで以上に学級担任が、教科担任や顧問と情報交換をする姿が見られるようになった。このように多くの教師がそれぞれの立場で生徒にかかわり、守秘意識をもって情報を共有することは、生徒理解において重要なことで、徐々に生徒の動向や考えが明確になるため、問題解決やその対策につながっている。

不登校生徒の対応

不登校状態になっている生徒に対しては、家庭訪問や電話連絡などを繰り返し、家庭との連絡が密になるように心がけている。しかし、問題が複雑になり相談の経過に進展が見られないときには、

「心の教室相談員」と連携を図りながら対応するようにしている。教師とは違った立場で相談に応じるため、気軽に相談することができ、生徒が自分の殻に閉じこもってしまうことを防いでいる。また、保護者からの教育相談も受けているため、様々な問題を抱えた生徒をもつ保護者にとって、心のよりどころにもなっている。引きこもりがちな生徒が孤立しないための大きな役割を担っているといえる。

さらに、問題の長期化や複雑化によって学校での解決が困難な場合には、総合教育センターの教育相談センターのような専門的な関係機関との連携を図る必要がある。

まとめと今後の課題

研修を受ける機会を得て、今まで学校で行ってきた様々な活動や生徒とのかかわりについて振り返ることができた。

子ども担当としての相談活動やゆうゆう広場の実習において、精神的エネルギーが不足してしまった子どもたちに対する言葉掛けや、子どもの気持ちに寄り添い、理解することの大切さを学ぶことができ、改めて教育相談活動の重要性を感じた。

また、学校における教育相談活動に大きなヒントを得ることができた。今まで生徒と十分なかかわりをもってきたつもりであったが、こうして省みると、生徒に対して指示する言葉が多かったように思う。しかし、今までとは違った、共感するような言葉掛けを意識し、実践することによって、相手に与える印象を和らげ、気持ちを楽しませる体験ができたように思う。

生徒に「人とかかわることの大切さ」を知ってもらうためには、日頃から生徒と信頼関係をつくり、生徒の言葉に耳を傾け、問題や悩みを受容し、共感的な理解で接する教師の姿勢が求められる。さらに、心の豊かさや人に対する優しさが得られる体験的な活動を増やし、その機会をとらえてコミュニケーション能力の向上を図ることで、より多くの生徒に対する理解がすすむと思う。

今まで、学校において「人とかかわることの大切さ」を主眼に試みた実践は少なかったように思う。今回の研修を通して学んだ経験や体験を、相談の場面や校内の研修会などの多くの機会をとらえて、広めていきたいと考えている。

最後に研修を進めるにあたり、この研修の機会を与えていただいたことに感謝するとともに、適切な指導とご助言をいただきました教育相談センターの皆様、勤務校の校長先生をはじめ学校職員の皆様に心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

全国教育研究所連盟	『教師の悩みに答える学校教育相談』東洋館出版社	1985年
岡堂哲雄編	『スクール・カウンセリング』新曜社	1998年
青野勇	『取り組もう学校教育相談』川崎教育文化研究所	1998年
内山喜久雄 山口正二	『生徒指導・教育相談』ナカニシヤ出版	1999年

【指導助言】

川崎市総合教育センター指導主事	伊藤 一晴
-----------------	-------